

「現代文明とユートピア」

「現代社会が夢見たユートピア像とは」

一五一六年、英国のトマス・モアは空想の理想郷を描いた小説を書き、「ユートピア（どこにも存在しない場所）」と名付けた。彼は既存の封建的な土地所有制度や経済システムがもたらす貧困などの様々な社会問題に対し、小説という形で批判を加え、今からすれば多分に社会主義的色彩の濃い理想郷を夢見た。しかしその本来ならばどこにも存在しない筈のものは、いつの間にか確たる理念として一人歩きを始める。モアのユートピア思想はやがて時を経てフランス革命の理念と融合し、サン・シモンやフーリエといった思想家によって、計画経済や、科学や工学の有効利用に支えられた社会体制の模索、いわゆる「初期ユートピア的社会主义」と呼ばれるものへと結実してゆく。彼等は科学技術が経済や産業と緊密に結びつくことは、理想社会を建設する上で最も重要な手段だと考えた。こうした科学技術—サン・シモンの場合では科学、フーリエであれば特に農学や工学—が、社会変革の大きな原動力となるという認識には、

ベーコン以降、西欧社会に広がりつつあった機械主義的世界観、この世界に機械的な調和を求めようとする姿勢が顕著に敬承されている。そしてそのほかならぬベーコンもまた、モアとは別個に、やはり偉大な人類の理想郷「ニュー・アトランティス」を思い描き、人間の叡智が偉大な理想社会の実現をもたらす可能性を模索していた。この初期ユートピア的社会主义に見られる顕著な特質である科学技術への信頼は、その後も人類史の底流となつて近年に到るまで、その流れをとどめることはなかった。かつてパリ万博で水晶宮やエッフェル塔がそうした科学技術への信仰をまるで体現するがごとく建造されたのと同じように、洋の東西、長い歳月を越えて、アジアの島国でもまた同じ科学技術礼讃の祭典が催される。一九七〇年、大阪千里で開かれた大阪万博である。「人類の進歩と調和」というメインテーマを掲げたこの博覧会には、日本中から老若男女が押し掛け、科学技術がもたらすはずの未来社会の幻想に酔いしれた。人々

田中 洋一

は「太陽の塔」が見下ろす会場に集い、国内各企業、あるいはアメリカやソ連を初めとする世界各国が建てた一見、未来建築を思わせるパビリオンの威容に胸踊らせることとなった。人々は高度経済成長の高揚とした気分の中、「科学技術」がやがてもたらす筈の偉大な未来社会の到来を信じ、まるでその前夜祭のごとく日本国中が祝祭の気分に酔いしれた。はからずもその万博のメイン会場の名は「お祭り広場」であった。当時まだ小学生であった私もまた、わざわざ東京から親に連れられて見学に出かけた。クラスの相当数の子たちも同様であった。子供ながらも当時のまるで熱病に浮かされたかのような気配は―それは何も子供たちだけではなく大人をも含めて―いまだ記憶に強く残っている。科学技術はこの二〇世紀、確かに戦車やミサイル、原子爆弾といった恐るべき破壊兵器を生み出した。しかしそれはあくまでその成果を取り扱い利用する人間の良心の問題であり、その力を正しき方向に導きさえすれば、必ずや素晴らしい理想社会は実現する筈である。戦後日本はまさにその実例であり、我々はその焦土から、目覚ましい復興を成し遂げた。科学技術はその最も中心的な原動力である、云々。

しかしまもなく日本の高度成長時代は終わりを告げ、つかの間、バブル景気が社会を覆ったあと、その栄華はもろくも崩壊する。そうした間、日本人の興味関心は「科学技術」よりもむしろ「経済」に終始し、かつてのような華やかな期待に胸膨らまずといった「科学技術」を巡る高揚とした風潮はいささか薄れていく。しかも「公害」（何とも不思議な名称であるが）と称される深刻な環境汚染問題が、我々の生活を脅かしさえし、人々は科学技術に対する素朴な信仰を疑い始める。しかし一方でこうした問題はあくまで、科学技術

の「悪用」「誤用」によるもの、正しい取り扱い方さえすれば、といった科学技術に対する信頼もまた生き続けた。はからずも当時筑波で開かれた科学博はそうしたある種のジレンマを露呈していたようにも思える。

片や再び西欧社会に目を転じると、戦後日本に顕著に見られた「科学技術によるユートピアへの期待」、言い換えるなら「科学技術の進展が社会進歩をもたらす偉大な原動力となる」という素朴な「進歩史観」は、西欧社会においても一つの潮流として存在し、多くの哲学・社会思想、更には遺伝学や進化論などに代表される自然科学の論議にまで影響を及ぼし、優生学やルイセンコ学説のような歪んだ事例すら生み出した。科学技術への素朴な信仰の反映は、エジソンやライト兄弟、アインシュタインといった科学者、技術者を偉人として称え、ついには人間社会の救世主、あるいはアイドルに近い扱いを受けさせるに到った。しかしこうした楽観的な科学技術観が蔓延する一方で、それが生み出すはずの未来社会に疑義を提出し続けたのもまた同じ西欧社会であった。

「ユートピア」なる語の誕生の母体となった小説という形での初期の代表例といえ、オルダス・ハックスリーの「すばらしい新世界」、ジョージ・オーウェルの「一九八四年」が挙げられる。ハックスリーの作品で、進んだ科学技術がもたらした安全で快適に管理された社会、その素晴らしいはずの社会に疑いを持ち、反旗を翻した主人公の名が「サベッジ（野蛮人）」であったのは多分に示唆的である。

一方、「科学技術ユートピア」のイメージが視覚的な訴求力を持つせいもあってか、映画の分野でもそうした批判が展開されてきた。

先鞭としては挙げられるルネ・クレールの「自由を我等に」、それを下敷きにしたといわれるチャップリンの「モダン・タイムズ」、フリッツ・ラングの「メトロポリス」、そして近年では「二〇〇一年宇宙の旅」や「未来世紀ブラジル」、「ブレッドランナー」など、こうした映画群に「科学技術文明」及びそうした文明がもたらす「情報管理社会」への批判を垣間見ることは容易である。最近の「フィヒス・エレメント」に至ってはまさにそのパロディ、また「もののけ姫」は日本社会の原点に立ち返つてのこうした批判の一種と受け取れることもできる。

こうした小説や映画が危惧するように、次第に人間管理の手段として利用されつつある「科学技術」を、人間は果たしてどう管理するのか。あるいはそうした管理そのものを忌避するのか。この点に關し、欧米でもまた日本でも、「反・科学論」「反・技術論」という形で一時期盛んに論議が行われた。もともとそうした批判は、科学と社会の結びつきを論じた、バナールを初めとする先人たちの著作にも当初から見られたものであるが、近年の盛り上がりは様々なイデオロギー論議や体制批判にまで発展した。その流れは現在、単なる批判ではなく、新たな方向性への模索を続ける動きとして静かに続いているように思われる。一例を挙げれば、オランダで現在進みつつある「ニューネイチャー運動」、これは干拓で築かれた肥沃な国土の何と一〇分の一を以前の湿地帯にわざわざ戻そうとする政策のことであり、国家の生産力の増大よりも、より精神的な自然との共生を国民が選択したことを意味する。ここには国家規模での管理の拒否、自然回帰の姿勢を見ることができ。

こうした最中、世紀末を迎えて世界中で宗教にからんだ事件が頻

発していることもまた興味深い。日本の「オウム」、欧米の「人民寺院」、「太陽寺院教団」、「ダビデの使徒(フランシ・デイビディアン)」、「天国の門(ヘブンス・ゲイト)」等々、記憶に残るものだけでも相当な数にのぼる。オウムの例でいえば、多くが理工系の技術者出身であるオウム幹部は、彼等の理想社会実現のためと称して、自らの高度な専門知識を利用してテロを引き起こした。確かに彼等が目ざした理想郷は、かつての科学技術ユートピアなどではなく、より精神的なものである。しかし科学技術をその為の手段とすることにについては変わりはない。同じように、ヘブンス・ゲイトの信者たちもまた現世を超越した理想社会への逃避をもくろみ、最終的には集団自殺を行った。しかし彼等が求めた現世からの解脱が、最先端科学の成果である宇宙船を利用しての地球脱出であったことに至っては、もはや途轍もないブラック・ユーモアに思えてならない。彼等もまたより素晴らしい高次の理想社会実現のためには、科学技術の効率的利用を厭わなかったのである。

果たして本当に、科学技術を「正しく」用いれば理想の社会は実現するのか。またそもそも理想の「ユートピア」とは何なのか。その明確な答えは無論のことない。そうした中、大人たちの間ではまるで最先端のテクノロジーを忌避するかのような「癒し」の文学―近年の「マディソン郡の橋」「聖なる予言」などはその一例―や精神療法(アロマテラピー等)が流行し、片や子供たちは膨大なバーチャル・リアリティーの海に溺れて、いまや空想と現実の境界線すら危うくしつつある。

冷戦は終結し、かって万博で威風たなびく国旗をかたどった巨大なパビリオンを建造したソビエト連邦は消滅した。それはある種の

ユートピア幻想の終焉を暗示するものともいえる。しかしその本質はより巧妙に隠蔽された形で現代の我々の文明の底流に潜み、具現化の時を待っているかのような印象を受ける。